

薩摩町における独居高齢者の生活実態について

高齢者が自立できる社会形成に関する研究 その3

正会員 ○佐藤 洋一*2
 正会員 友清 貴和*1
 正会員 久野 貴行*2
 正会員 山下 剛*2

1. 研究の目的と方法

高齢者福祉の究極の課題は、高齢者が心身共に健康で生きがいをもって生活できる環境をどのようにつくっていくかにかかけられている。つまり、高齢者福祉の領域は、単に弱者としての高齢者の保護に止まらず、高齢者の日常生活のすべてに及ぶようになっている。雇用機会の拡大、年金や医療保険による保証や、諸種の福祉サービスの充実、高齢者福祉に不可欠な条件であるが、これだけでは十分ではない。これらの諸条件を満たすうえでは、高齢者とその周囲の人々のための環境の整備が条件となる。

そもそも高齢者とその周囲の人々が住みよい社会とはなにか、それは高齢者が個人としてのアイデンティティ維持をした自立生活が保証され、かつ人間としての連帯性が周囲の人々とともに満たされた社会である。

今後の高齢社会に対して、このような社会形成を行ううえで、間違った選択をせず、先見的な準備を怠らないようにすることが重要な課題となる。

高齢者問題の解決のためには物的資源（経済）・人的資源（サービス）・精神的資源（愛情・情報）のすべてが必要であり、生活保障面における公助・互助・自助の兼ね合いが、そして親・子・孫、ひいては社会的規模での両性並びに老年・中年・若年の連帯が不可欠なものとなる。

そこでこのような社会形成を行ううえで、現在、高齢者がどのような自立生活を送っているか、またどのようなシステムが高齢者の連帯性を保証しているのか把握する必要がある。

今後の社会を見据え、自立という面をとらえた場合、社会との連帯生活を単独で行っている高齢者独居世帯（独居高齢者）に焦点を当て、その現状を把握することが必要であると考えた。

そこで本研究においては、独居高齢者を自立する高齢者にとらえ、独居高齢者に関する属性と高齢者を取り囲む環境の相違により、いかなるサポートシステムが存在するかを明確化することを最終の研究目的とし

ている。

平成4年に鹿児島市、平成5年には指宿市、入来町の独居高齢者の生活実態の調査分析を行い知見を得ている。¹⁾そこで本編においては農村的性格の極めて強い薩摩町の独居高齢者を対象として調査を行い、この地域の独居高齢者の生活実態について分析をする。

2. 調査概要

2-1. 調査地区の概要

総人口5,287人に対して65歳以上の高齢者の人数は1,364人で高齢化率は25.8%と、国及び鹿児島県の平均を大きく上回っている。【表I】²⁾

【表I】薩摩町の状況及び変遷

高齢化率	1975年	1980年	1985年	1990年	2000年
薩摩町	15.3%	18.2%	21.8%	25.8%	37.4%
国	7.9%	9.1%	10.3%	12.0%	17.0%
鹿児島県	11.5%	12.7%	14.2%	16.6%	21.0%
人口構成	1975年	1980年	1985年	1990年	2000年
総人口	6,273人	5,848人	5,598人	5,287人	4,633人
老年人口	959人	1,067人	1,223人	1,364人	1,735人
前期	623人	694人	775人	800人	967人
後期	336人	373人	448人	564人	768人
40歳以上	3,417人	3,444人	3,395人	3,340人	3,258人
70歳以上	607人	668人	804人	938人	1,244人
生鮮人口	4,004人	3,714人	3,462人	3,093人	2,259人
年少人口	1,310人	1,067人	913人	830人	639人
高齢者のいる世帯	1975年	1980年	1985年	1990年	
一般世帯数	1922世帯	1890世帯	1875世帯	1934世帯	
65歳未満だけの世帯	1168世帯	1050世帯	959世帯	938世帯	
65歳以上のいる世帯	754世帯	840世帯	916世帯	996世帯	
高齢者独居世帯	124世帯	181世帯	223世帯	270世帯	
高齢者夫婦世帯	146世帯	174世帯	224世帯	270世帯	
その他の世帯	484世帯	485世帯	469世帯	456世帯	

生産年齢人口:15歳以上64歳以下の人数 年少人口:14歳以下の人数

薩摩町の主産業として農業があり、総戸数1,891戸に対し、農家戸数は1,035戸（54.7%）を占めている。一方商工業はほとんどが零細企業であり、経済社会の発展により、主要産業は別として消費産業を含め町外に求めている傾向は依然強いものがある。

2-2. 調査方法及び調査集計

薩摩町役場及び民生委員の協力を得て、いわゆる「離れ」「隠居」など同一敷地内に家族が生活を営んでいる高齢者は除外して、65歳以上の独居高齢者をランダムに紹介してもらった。

9月から10月にかけての11日間に対象者宅を訪問し、

*1 鹿児島大学助教授・工博 *2 同大学院生

ヒヤリングで得た回答を当方が記入する形式で調査を行った。

回答を得ることができたのは97名であった。【表Ⅱ】

【表Ⅱ】調査結果の状況

	65～69歳	70～74歳	75～79歳	80歳以上	合計
男性	1名	6名	2名	0名	9名
女性	11名	33名	21名	23名	88名
合計	12名	39名	23名	23名	97名

※平均年齢:75.5歳 平均独居年数:18.2年 平均居住年数:42.1年
薩摩町の独居高齢者男女人口比 15.0(女性の人口を100とする)

2-3. 調査項目とその結果(単純集計)

今回実施した調査の項目及び調査結果(単純集計)は記す。項目毎の合計が一律でないのは意見無し及び分類不可のためである。【表Ⅲ】

活動場所を伴う項目は活動の場も回答してもらった。

【表Ⅲ】調査項目及びその主な集計結果(単純集計)

調査項目	回答項目	人数	調査項目	回答項目	人数
住居形式	持地持家	84	隣人関係	親しい	70
	借地持家	11		まあまあ	13
	民間借家	1		挨拶程度	12
	公営住宅	1		交際無し	2
居住年数	0～9年	6	子供の存在	子供いる	86
	10～19年	7		子供なし	11
	20～29年	8	子供との別居距離	同町内	18
	30～39年	9		県内	36
	40～49年	33	県外	31	
	50年以上	34	子供との対面周期	毎日	7
独居年数	0～9年	32		週数回	14
	10～19年	21		月数回	23
	20～29年	27		年数回	29
	30～39年	10	数年に1回	8	
	40～49年	3	集会所への参加状況	不参加	31
50年以上	3	老人会のみ		26	
友人数	0人	16		教会・睦	21
	1～2人	38	他会のみ	19	
	3人以上	34	他会:老人会以外のサークル		
独居の理由	積極的独居	自立して生活できる		14	
		誰にも気兼ねしなくてよい		7	
		今の地域に馴染んでいる		24	
	消極的独居	子供と一緒に住もうとしない		1	
		子供の経済が苦しい・家が狭い		5	
		子供に迷惑をかけたくない		3	
	保守的独居	家(本家)があるから		6	
		墓を守らなければならない		3	
その他	みんな嫁に行ったなど		6		

3. 調査結果の分析及び考察

薩摩町における独居高齢者の生活実態の特徴を明確にし、かつ今後の問題点について示唆し得る項目をピックアップし、それらをクロスさせて分析した結果を考察する。

3-1. 個人的内容に関する調査結果

3-1-1. 経済状況

独居高齢者の95名(97.9%)が年金・恩給を受けていた。しかし国民年金・厚生年金・恩給など年金の種

類によって、収入に大きな差がみられる。

性別でみると、男性は月平均支出額は96,250円であるのに対し、女性は月平均70,975円であった。男性は食費が女性よりかかっている。しかし交際費は男性が月平均9,625円(10.0%)であったのに対し、女性は月平均20,757円(29.2%)と、全収入に対する女性の交際費が男性の交際費よりはるかに高い割合を占めている。しかし、性別以外の他の項目とのクロス集計で特に主だった結果は見受けられなかった。

3-1-2. 行政からの福祉サービス

行政から福祉サービスで特徴的なことは、高齢になるほど緊急電話の設置と給食サービス利用者の割合が高くなるということであった。

また薩摩町においては温泉入浴券を配布しているが、温泉が交通不便な場所にあるため、交通手段(車等)を持たない人はほとんど利用していなかった。

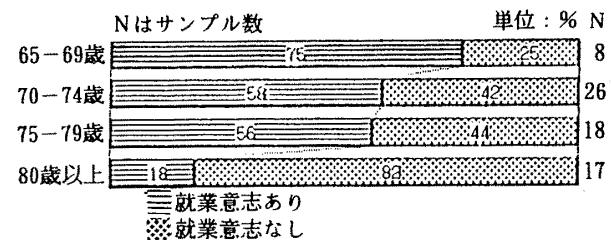
福祉サービスを提供する際、交通手段等サービス利用に至るまでの段階まで考慮したサービスでなければ、高齢者にとっては無意味なものになる。

3-1-3. 就業

就業者の条件として、就労所得を得ている高齢者を有職者としている。まず、有職の人は16名で、就業率は16.5%であった。その職種については自営業が8名と農業2名等と従前の職業の継続を行っている人が多かった。

また、無職である81名に対して就業意志の有無を確認した。回答した69名の内、約半数の34名が就業することを望んでいる。これは若年高齢者ほど高い割合となっている。【図Ⅰ】

就業意志のある34名に対し、就業しない理由を回答してもらった結果、健康上の理由を挙げる人20名、適業を見いだせない人16名等となった。後者は高齢者の健康状態と雇用条件との格差が問題となっているようである。



【図Ⅰ】年齢階級別にみる就業意志の有無

3-1-4. 独居であることの欠点

独居であることの欠点を回答してもらった【表Ⅳ】

独居であることに対して実用的な項目よりも、日常の精神的な項目・将来的な項目に不憫さを感じて傾向が強いことがわかる。

また「近所との付き合いを1人でしなければならない」という回答は、過去からの調査の中で、初めて回答された項目である。これは農村的性格をもつ地域特有の欠点ではないだろうか。

【表Ⅳ】独居であることの欠点

	独居の欠点内容	人数	合計
日常実用的	家事がたいへん	4	16
	家の修理・力仕事ができない	7	
	近所との付合いを1人ですること	5	
日常精神的	寂しい・話し手がいない	24	40
	犯罪への不安	16	
非日常的	病気のとき	16	30
	自然災害のとき心配である	14	

3-2. 対人関係及び集団行為

前節では個人的な項目についての分析を行った。

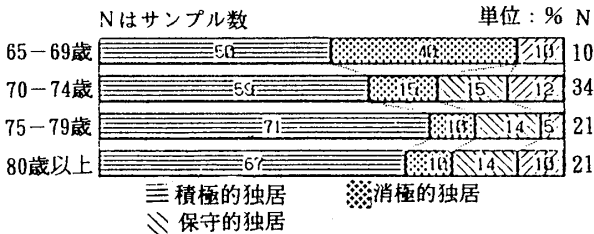
そこで本節では対人関係及び人と共にを行う項目についての分析・考察を行っている。

3-2-1. 子供との関係

子供がいる人は86名で、これらの回答者に、子供と生活をしない理由を回答してもらい、「独居の理由」として3類型した。【類型は表Ⅲ参照】

積極的独居の人が45人と半数弱を占めている。特に理由として多くみられたのが「今の地域に馴染んでいない」という回答であった。

年齢階級別にみると、高齢ほど独居に対して積極的になる傾向が強いことが分かる。【図Ⅱ】

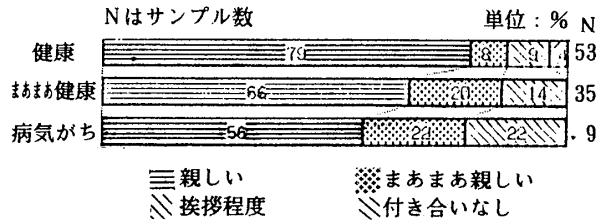


【図Ⅱ】年齢階級別にみる独居である理由

3-2-2. 隣人関係

隣人関係を性別でみると、女性の方が男性より隣人と積極的に付き合っていた

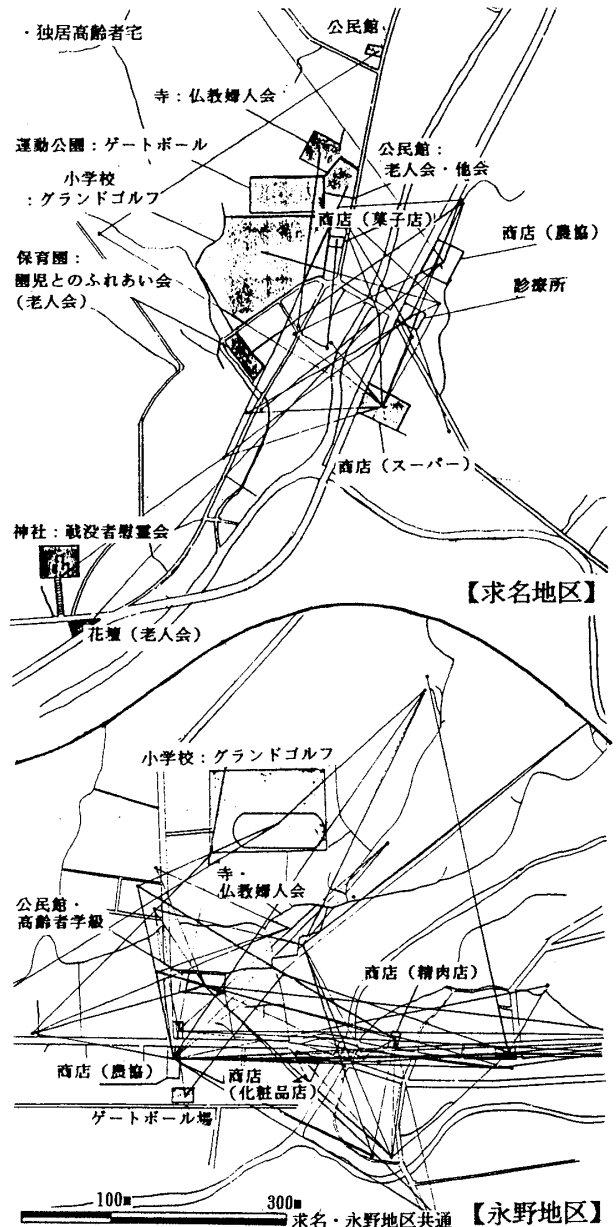
また健康状態別にみると、健康である人の方が積極的に隣人との付き合いがあった。【図Ⅲ】



【図Ⅲ】健康状態別にみる隣人との関係

3-2-3. 行動場所

薩摩町の2地区（求名、永野）に調査対象者が、比較的密住していることから、日常の行動場所を回答してもらい、調査対象者宅と共に地図にプロットし、施設と独居高齢者の関係を見た【図Ⅳ】



【図Ⅳ】求名・永野地区の独居高齢者の行動

直線距離にして600m以内の地域を行動範囲としている人が多いことがわかる。

2 地区に共通する場所は、運動をするための小学校・運動グラウンド、買い物を行う商店・農協、集会のための公民館、寺であった。本調査でこうした施設及び施設への往来過程が、薩摩町の独居高齢者において他の高齢者等と情報交換を行う場として重要な役割を果たしていることが確認できた。

また求名における保育園は、老人会で「園児とのふれあい」会を開催する場であり、園児と遊ぶことが独居高齢者の生きがいにもなっている。精神的な面で孤独を感じる独居高齢者にとって有効な要素である。

3-2-4. 生きがい

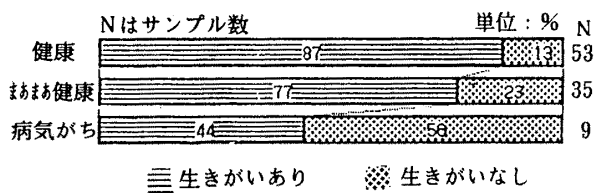
調査対象者に生きがいの認識について回答してもらった結果、何らかの生きがいを持っている人は77名(79.4%)であった。

ここで見られた特徴は、健康状態によって生きがいの認識が異なることである。健康な人ほど生きがいを見いだしており、逆に病気がちな人に生きがいを見いだしていない人の割合が高くなっている。【図V】

また生きがいがあると回答した人に、その生きがい内容を回答してもらった結果、趣味、子供・孫、対人関係(子供・孫以外)が大きな割合を示していることが明らかになった。【表V】

特に子供・孫に対して生きがいを見いだしている人の中で、「自分の菜園でできた作物を子供や孫に送る」という回答が多く見受けられた。子供や孫との対面が非日常的であっても、子供や孫は独居高齢者にとっての生きがいとなりうる重要な要素となっている。

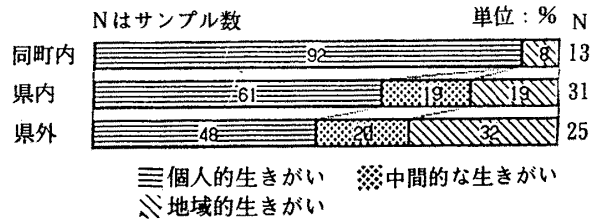
また生きがいとなり得る内容を個人的な生きがい要因と地域的な生きがい、その中間的な生きがいの3つに類型し、種々の項目とクロスした結果、子供との別居距離との関係において、子供が遠くに在住しているほど地域的な要因に生きがいを見いだしていることが認識できた。【図VI】



【図V】健康状態別にみる趣味・生きがいの有無

【表V】趣味・生きがい内容の分類

個人的生きがい						地域的な生きがい	
健康	趣味	仕事	子供・孫	信仰	ペット	対人関係	その他
11名	28名	12名	23名	5名	3名	22名	13名
14.8%	36.3%	15.6%	29.9%	6.5%	3.9%	28.6%	16.9%



【図VI】子供との別居距離にみる趣味・生きがい

4. まとめ

以上のようなことから、薩摩町における独居高齢者の生活実態が明らかになった。

経済的にみて、月平均支出額に、性別差は見られなかったものの、経済的条件から独居高齢者の生活スタイルに目立った特徴は見られなかった。

また薩摩町は適業を見いだしにくい、また行動範囲が比較的限定的になっているにも関わらず、「今の地域に馴染んでいる」と回答している人が多かった。

これは、独居高齢者を支えている主な要因に対人関係が重要な要因として作用している結果であろう。

対人関係特に子供及び隣人との関係が、現在高齢者問題で焦点となる生きがい創出に影響を及ぼしていることから、如何に人間の交流を良好に図っていくかによって、今後の社会に対して明るい展望が開けるのではないかと。

注釈

- 1) 山下剛他：独居高齢者の生活実態について、1993年 日本建築学会研究報告 九州支部
佐藤洋一他：鹿児島市周辺の独居高齢者の生活実態について、1994年 日本建築学会研究報告 九州支部
- 2) 国勢調査及び推計より

謝辞

本研究を進めるにあたり、調査に協力して下さった独居高齢者の皆様並びに薩摩町役場町民課、民生委員の方々に多大なご協力を頂きましたこと厚く御礼申し上げます。